

新学習指導要領における小学校外国語（英語）教育の早期化・教科化に対する条件整備

著者	長尾 明也, 類家 斉
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	56
ページ	77-92
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002666/

新学習指導要領における小学校外国語（英語）教育の 早期化・教科化に対する条件整備

Condition ordering to elementary school foreign language (English) educational
early stage-ization in new course of study and subject-ization

長 尾 明 也* 類 家 齊**
Akiya NAGAO Hitosi RUIKE

I 研究の概要

1 はじめに

今、まさに変革の機を迎えた小学校外国語教育の在り方について、現時点と次年度からの移行期間の2年間、そして、完全実施となる平成32年度からの態様を現時点で捉えられる在り方として考察する。ただし、平成30年1月時点では、評価の在り方のように文部科学省としての指針を策定中のところもある。したがって、札幌市教育委員会・北海道教育委員会としての方針も確定に至りづらい一因となっているのではないかと考えられる。

このような状況の中でも、活動例が示されたり、次年度からの研修ハンドブックや新教材が示されたりするなど、情報量としては膨大なものとなっている。文部科学省が示す次年度以降の方針や新学習指導要領を可能な限り詳細に分析し条件整備に関わる最善の準備の在り方について論を進めるが、考察に当たっては、それらの一部を取り上げるものであったり、概要をつかみながらの考察となったりする場合もある。いずれにしても、小学校の現場で平成29年度後半から移行期間に当たる平成30年度・31年度の在るべき方向については、その内容を早急にかつ正確に把握し、理解することが必要である。ここでは、確実に実施する必要があると示されているものについての扱いも含め、現段階での小学校外国語活動の実施状況との関連で小学校外国語科・小学校外国語活動の今後の在り方に対する条件整備についての捉えを明らかにしていくものである。

なお、小学校外国語科・小学校外国語活動の今後の在り方に対する条件整備に関わる論を展開するに当たっては、以下の立場（下記項目、A 及び B）での考察を行うことで、より実効性の高い取組を時系列で行うことが可能となると捉えている。（表1）

A. 教員養成系短期大学における条件整備の在り方

- a. カリキュラムの理解を進める研修について
- b. 指導法研修の在り方について

○上記 a. b. については、平成30年度から新学習指導要領完全実施となる平成32年度までの3か年を見通して北翔大学短期大学部こども学科のカリキュラムを基に考察し、極限られた時間の中で実施できる試案として示す。

B. 現在の公立小学校での条件整備の在り方

c. カリキュラム整備について

d. 指導法研修の在り方について

○上記 c. d. については、平成30年度から新学習指導要領完全実施となる平成32年度までの3か年を見通して、平成29年度札幌市立大倉山小学校カリキュラム・文部科学省研修ハンドブック・移行期間に使用する新教材（Let's Try! 1. 2, We Can! 1. 2）を基に考察し、提案する。

○ただし、札幌市においては、平成30年2月に発行予定であるとされている「指導の手引き」が提示されたのちは、その内容を勘案し、再構成していくことが必要となる。札幌市教育委員会が「指導の手引き」を発行した後は、即応していかねばならない。北海道教育委員会にあっては、各教育局もしくは各市町村教育委員会によって対応が異なることも予想されるため、本論の具体を提示する際の基盤としている基本的な考え方を基にして準備を進めていくことが必要ではないかと捉えている。

○公立小学校での条件整備については、学生が初任者等として着任すると同時に、経験の差による許容なく業務を進めることが求められる。特に、初任者にあっては3. 4年生への配属が比較的多いことから、公立小学校での対応の在り方を具体的に研究していくことの必要性は高い。

表 1	A 教員養成系短期大学		B 現在の公立小学校	
	a. カリキュラム研修	b. 指導法研修	c. カリキュラム整備	d. 指導法研修
30年度	①	④	⑥	⑨
31年度	②	⑤	⑦	⑩
32年度	③	⑤	⑧	⑪

①から⑪の分類は、数字を同じとしているものについては、同内容を示している。

本論は、平成30年1月現在で札幌市教育委員会及び北海道教育委員会が示している次年度以降への対応状況を基にして、カリキュラム研修・カリキュラム編成・指導法研修の在り方について展開することを基本としている。ただ、下記の理由（※1）により、一元化した考えを示すことは困難であることから、本論を基に柔軟な解釈をしていくことが肝要である。さらに言うならば、現場での指導へつなげていくより具体的なカリキュラムマネジメントは、各学校の校長のリーダーシップによって最終的に編成されていくものであるのだから、本論がすべての範囲を網羅できる理念や考え方、取組の具体的なガイドラインを示すことはできないことも理解しておく必要がある。

※1 北海道教育委員会については、各教育局及び各市町村教育委員会にその扱いをゆだね

ている状況があること。札幌市教育委員会においては、札幌市内各小学校の指導時数を、平成30年度は3．4年生20時間、5．6年生55時間としていること。平成31年度は、更に時数の上積みを計画しているとの情報もあること。

2. 本論の構成

I	研究の概要
II	平成29年度までの小学校外国語（英語）教育の状況
III	現在の小学校外国語（英語）教育の位置
IV	平成29年度の変化
V	教員養成系短期大学で必要と考えられる新学習指導要領における小学校外国語（英語）教育の早期化・教科化に対する条件整備
VI	現在の公立小学校で必要と考えられる新学習指導要領における小学校外国語（英語）教育の早期化・教科化に対する条件整備
VII	まとめ

3. 本論の構成の理由

① 現在までの外国語教育の変遷に触れ（論文項目Ⅱ～Ⅳ）、解説をする必要性

現在に至るまでの文部科学省の英語教育への足どりを正しく理解することで、最終的な到達点を正しく理解できることとなる。これは、現在行われている指導が、外国語（英語）教育の構造のどの位置にあるのかを正確に認識することが重要と考えているからである。指導に当たる教員が本来必要とされていない部分にまで踏み込んだり、自己の恣意的な思いを先行させたりして指導に当たり、カリキュラム編成やカリキュラム研修、指導法研修の現場に無用の混乱を生まないためである。また、このことは、何よりも、児童にとって安心できる授業が提供されるということであり、ひいては、保護者からの深い理解と厚い協力にもつながる。英語教育を取り巻く環境要因の一つとして、重要な位置を占める保護者の理解と協力が確立できれば、児童の知識・理解・思考力といった総合的な能力が大きく伸長することとなる。このことを実現できる教員の存在への必要感が高い。

② 小学校外国語（英語）教育の現状に触れ（論文項目Ⅲ）、考察をする必要性

筆者らは、札幌市内等の公立小学校で小学校外国語活動の授業を参観する機会は少なくないが、それらはどれも、先進的に取り組んでいる学校であったり、高い意識をもった教員による授業であったりする。また、これら以外の学校も含め、小学校外国語（英語）活動を専科指導としているところも少なくない状況もある。これらの対応や実践の違いは、専科指導を導入するか否かの判断を各学校に任せていることによるものであったり、学校独自のカリキュラムを作成するのではなく、教育委員会から示されるカリキュラムによる指導を行っているといった実態の違いがあったりすることによるものである。

以上のことから、各小学校の教員が、いつでも誰でも指導に当たれる状況に高まってい

なければならないことは明白である。この意味から、小学校外国語(英語)教育の現状に触れ、考察を加えて、条件整備につなげていく必要があるのである。

③ 指導法研修が多岐に渡る想定としていることについて(論文項目Ⅴ及びⅥ)

本学短期大学の学生にとっては、研修に重要な位置を占める実際の指導場面に触れる機会がごく限られたものになってしまうため、まず、その機会の確保が最も大切な要素となる。併せて、小学校の授業として成立していなければならないという点が求められ、外国語(英語)指導のための研修要素をこなせばよいということだけでは、許容されない状況もある。指導者の経験値に差があることを理由として指導に当たったとしても、いわゆる主体的で対話的で深い学びは、当然のように常に求められるのである。

本学短期大学の学生においては、8単位授業の中で、可能な限りの要素に触れる必要があり、その研修カリキュラムには実効性と伴に凝縮性も問われることとなる。前述のように、実際の対応につながる実質的で完全な研修は時数的に不可能であることから、その考え方や全国・全道・札幌市の動きについては、情報をいつでも得ることができる状況を維持し、必要充分である研修を計画し、実施しなければならないのである。北翔大学短期大学部学生に対しても、ガイドを示しつつ、継続的な自己啓発に努めることを強く促し、自主的な研鑽を積むように指導していく必要がある。

Ⅱ 平成29年度までの小学校外国語(英語)教育の状況

先行的な活動を取り入れている一部の小学校を除き、5・6年生での実施となっており、ハーフレンズでの実践が一般的である。ただ、補助教材であるハーフレンズプラスやストーリーブック、文部科学省関係のウェブに公開されている動画等を参考にしている実践も、限られた範囲ではあるが少数の小学校で実施されている。

この大きな流れを生み出しているのは、下に示している「5つの提言」である。この中に、小学校英語の流れが示されている。英語教育の流れの中で、高等教育からの玉突きや前倒しということではなく、小学校教育を含めた初等中等教育からの一貫した捉えとなっていることを正しく理解する必要がある。

【国際共通語としての英語力向上のための5つの提言】2011年(平成23年)6月

改革①小学校3・4年活動型…音声の慣れ親しみ、小学校5・6年4技能…教科/改革②英語を使って何ができるようになるか(CAN-DO)/改革③高等学校・大学の英語力評価・入学者選抜の改善/改革④教科書検定・デジタル教科書・教材の検討/改革⑤学校における指導体制の充実・英語教育推進リーダー、

Ⅲ 現在の小学校外国語(英語)教育の位置

小学校は、平成30.31年度が移行期間となっている。新学習指導要領が、円滑に開始され、完全実施できるように、2年間をかけて、自然な形で平成32年度を迎えられることが最重要な課

題である。従って、段階的に扱う内容も併せて示している。児童の混乱や学習状況の著しい差、十分な指導とすることができるのか否かという期間的な問題を勘案しての措置となっている。現場を含め、研修に当たる者、カリキュラム編成に当たる者は、前述の状況も明確に捉えていか

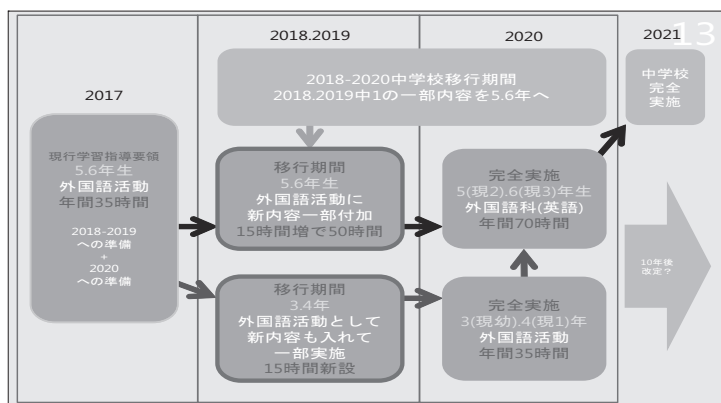


図1

なければならない。教科書検定は平成31年度となる。すべてのスケジュールは上（図1）に示した。

Ⅳ 平成29年度の変化

- 【平成29年】 3月～新学習指導要領公示、4月～外国語活動・外国語科年間指導計画例、
6月～学習指導要領解説、7月～移行措置関連資料・研修ガイドブック、
9月～年間指導計画案・5. 6年生児童用冊子 We Can! 1. 2等、
12月～年間指導計画案・3. 4年生児童用冊子 Let's Try! 1. 2等

この流れの中で、実際に指導に当たっている学校現場でもっとも必要とされていたのは、9月及び12月に示された児童用の冊子、いわゆる新教材の具体的な内容である。これには、音声教材及び映像教材の音源などもほぼ同時に示された。この意味は、大変に大きいと捉えることが重要である。具体的な研修が可能な状況が、これだけ早く整っていることから、カリキュラムの編成を急ピッチで進めることができると同時に、実際の授業を一部であったとしても模して研修を行ったり、場合によっては、新教材の要素を授業の中に取り込んだりといったこともできるからである。各校の学校長の判断による部分も大きいですが、児童の前に立っている教員の一人一人が強い意識をもって、学校職員に働きかけていくことが必要である。このことは、本学や本学学生にとっても全く同じ状況であると捉えるべきである。

新学習指導要領では、小学校外国語（英語）活動の教科化・3. 4年への導入など、英語に関する変化が最も大きいと捉えられ、その時数の増加も、35時間に達するのであるから、今改定の最大の変更点であろう。周到な準備が必要である。

外国語活動・外国語科の特徴 研修の重要性を考える場合には、新学習指導要領外国語活動・外国語科の特徴を正しくつかむ必要がある。新たな活動には、はっきりとした9つの特色がある。特色を理解してから新教材を見ていくと、とても分かり易い状況となる。日本語で進める教科と違い、英語という一つ大きな負荷がかかっているの、準備は欠かせない。授業として成立していなければならない点を考えても、概要をはっきりとつかんでおくことは絶対条件となる。枝葉から学んでしまうと、行き先を見失うことにつながりかねない。また、新教科

や新たな活動，新教材の構成を正しく理解し，明快な授業を実施できる教員，子どもに分かる授業をする先生は，厚く信頼されることとなる。このことは，先にも述べた保護者からの信頼にもつながり，学級・学年・学校への協力的な姿勢となって，児童の指導に相乗し，指導の効果をより高めていくこととなる。後述するが，このことは，学習内容が児童の中に積み重なっていかなければならないとされている教科としての今後を考えると，大変に重要な要素となる。教科は評価を伴うものであり，保護者や児童はその妥当性や客観性を問うからである。

以下に新教材の特徴を9つ挙げる。解説はその後，項目毎に行う。①子どもの興味・関心に合う題材の設定，②場面設定から使われている語句や表現を推測し，語句や表現に出会わせる活動の設定，③映像資料を活用して，考える活動の設定，④既習語句や表現を繰り返し活用する活動の設定・対話の続け方を身につける活動，⑤言いたいことを表現できるような無学習内容の設定，⑥細かなステップを踏んだ，読む・核の活動の設定，⑦ゆっくり文字を読んだり，書いたりする活動の設定，⑧よんだり，書いたりする必然性のある活動の設定，⑨読むことになれる，自分で読むようになる活動の設定

【①子どもの興味・関心に合う題材の設定】

単元配列の意味

日常生活に合わせた単元配列となっている。詳細な解説はしないが，ハイフレンズですでに実績を上げている単元も多くあり，ハイフレンズから導入していた流れでもある。小学校ならではの考え方であり，子どもたちの関心・意欲を大切に学習や学級担任制のよさを生かしているものとなっている。以後の解説の中でその中のいくつかについて触れる。

三人称の導入の意味

主語に関しては，現在使用しているハイフレンズでも基本的には，IとYOUしか扱わないこととなっている。一人称と二人称の主語のみの扱いである。英語を声に出すことは確かにハードルの高いものであり，一人称と二人称の主語に限定していたとしても同様である。ただ，これを2年間に渡り繰り返すと，慣れにも押されながら声を出すというハードルは超えるが，次第に物足りなく感じてくるとされている。外国語（英語）活動6年間の成果としての報告である。子どもたちのからの声としても上がっていることだが，自分とあなた以外の人についても語りたい，目の前にいない人のことも語りたいということである。そこで，その興味・関心に応える意味で，三人称を扱うこととしているのである。中学校から前倒しされた内容ということではなく，あくまでも，子どもたちの興味関心を大切にして，必要感にのっとった設定ということとなっている。小学校の新教科としての発想によるものである。

図2には，We can! 1 Unit5を例示した。5年



図2

生の秋頃に扱う単元である。題名から、すでに三人称となっている。子どもたちは音声をしかりと聞きながら、三人称の扱いについて理解していく。この中には、形容詞や副詞の扱いもある。5年生のこの時期にしては、簡単な扱いではないし、あえてそのことを取り上げて指導することもないが、興味・関心が高まっている状態の中での扱いであれば、子どもたちにとっての障害ということにはならない。さらに、三人称単数のsの扱いもcanを使うことで消している。これは、書く活動から英語に触れるのではなく、あくまでも話す・聞く活動が重視されている小学生にとっては、三人称単数のsを聞き取り、理解していくことが困難であるからである。

過去形の導入の意味

We can! 2 Unit5で過去形を扱うこととなっている。これも、三人称の導入と同様の意味をもっている。題名の、My summer vacationからも想像できるようになっている。過去形がなければ、夏休みを語りづらいということである。

子どもたちがこのユニットと出会う時期については、よく考慮しなければならない。子どもたちの実態と重ねた時に、個人的な事柄に必要以上に深く立ち入らないこと、家庭事情によっては、触れづらい部分も含むことも考慮しながら展開していくことも必要である。また、教科としての位置づけとなっている5.6学年については、中学進学が近づくこの時期、毎時間の学習内容・話している英語の内容は、定着していくことが求められているということも改めて意識したい。次の時間に学びが残っていなければならないのである。

6学年の最後に至る時には、小学校生活を振り返る単元や学びの集大成としての単元の位置づけもあることから、重要な点となる。中学校への接続というカリキュラム編成ではないが、各学校の取組によって、進学時に内容定着の差が著しいという状態は避けなければならない。

【②場面設定から使われている語句や表現を推測し、語句や表現に出会わせる活動の設定（解説をしないで場面設定をする自然な場面設定となっている。語彙や表現の意味を推測させる。）
③映像資料を活用して、考える活動の設定（設定されている場面から推測する。思考している状況とする。）】

語句や表現との出会いに意図をもたせる 推測の大切さ

②③の特色を体現するための活動Let's Watch and Thinkが設定されている。3.4年生より5年生の方が多い。5年生より6年生はより多く設定されている。当然のように、培った英

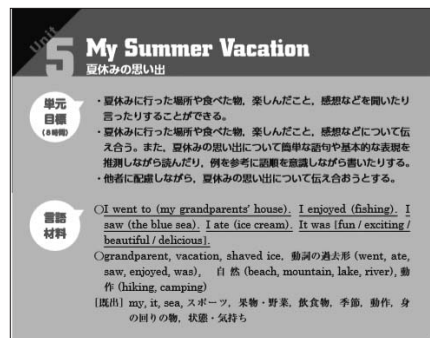


図 3



図 4

語を十分に使った場面設定となっているので、指導者の思いのみで、付け加えたり、変更したりといったことは慎むべきである。新たな設定にはかなりの困難が伴い、实际的ではない。

この活動は、場面設定に使われている語句や表現の意味を推測するように設定されている。そして、この活動がより円滑に進められるように、映像が活用されているのである。小学校ならではの設定であるが、中学校もこうありたい指導であるとされている。

ただ、中学校にあっては、文字指導の時期と語句や表現との出会いとの関係が小学校とは異なることも考慮していかなくてはならず、一概に同様に行うべきとの論理にはならない。

(具体的な例) 図5

We can! 1 Unit1 Hello, everyone.で考えてみる。5年生の児童にとっては、簡単ではないと考えられる。どんな音が聞き取れたか、という程度のかかわりで十分とされている。

例えば、Kyoto/ips/University等が聞き取れればそれでよいとして説明されている。教えるのではなく、みんなで推測することがよいのである。「ああ、何かの研究、大学の人かな」程度でよいのである。全部聞き取れなくても構わないのである。子どもたちに引かかる言葉は様々であるが、丁寧に上げていきたい。そして、推測を膨らませ、子どもには、いつか分かるようになる、話せるようになるのだという希望をもたせる活動としていきたい。中学校になったら、話せるようになってくと励ますことも必要なことである。ただ、教科として実際にそうになっていくことも求められていることを忘れてはならない。

会話を意識したLet's Watch and Thinkの設定(図6)もある。会話というハードルは低くないので、簡単な内容ではあるが、まずはここからということになる。会話するということ自体が大切なのである。ごく簡単だが、実際の会話となると、勇気がいる。子どもたち同士の活動として道案内が設定されている単元もある。

【④既習語句や表現を繰り返し活用する活動の設定・対話の続け方を身につける活動】

Small Talkの重要性

Small Talkとして、慣れ親しんできた表現を再度繰り返し活用する活動が数多く導入されている。同じ表現を何度も使って、定着を目指すことに加え、できるだけ対話を長続きさせる手段をも身に付けさせることをねらっ

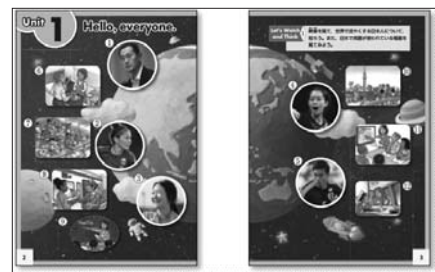


図5

スクリプト

Let's Watch and Think 1

① Dr. Yamanaka Shinya is a professor at Kyoto University. He received the Nobel Prize in 2012. He studies about iPS cells. (山中伸弥教授)

② Kawasumi Nahomi is a pro-soccer player. She won the World Cup and she also got a silver medal in the Olympic Games as a member of Nadeshiko Japan. Now she is playing for Seattle Reign FC in America. (川澄奈穂美選手)

③ Tani Mami is a triathlete now. She is a paralympian. She lost her right leg when she was nineteen. Then she went to the Paralympic Games in Athens, Beijing and London. She was a long jumper. (谷真海選手)

⑩ 観光ガイド: Please look at the tower in front of us. It's Tokyo Skytree. It was built in 2012 and it's 634 meters high.
観光客: Uh-huh. (写真を撮っている)

⑪ 司会: Good morning, ladies and gentlemen. Please take a look at your handout. Any questions?

⑫ タクシーの運転手: Where would you like to go? Asakusa? All right. It takes about 15 minutes from here.

図6

た活動の設定となっている。指導案にも毎回載せるべきものとの考え方もあり、指導案作成時には必ず検討すべきものとなっている。その際には、単位時間の指導、単元全体の指導のバランスを勘案していく必要も同時に考慮していくことが望ましい。学



図 7

校によっては、単位時間の指導に限らず、別の時間設定の中で習熟を図るといった例もある。学校にあっては、研修担当の一存で決定できるものではなく、カリキュラムマネジメントの側面も含めて総合的に考えていくべきものであるが、積極的に導入したい。すでに、文部科学省監修の研修ガイドブックの中にスモールトークが各単元一例ずつ掲載されている。音源もウェブ上に公開されている。(図 7)

【⑤言いたいことを表現できるような学習内容の設定】

三人称・過去形・動名詞導入の意図

三人称・過去形・動名詞の扱いについては前述しているが、改めてこの視点で記述する。

文部科学省は、三単現のsを十分に理解するためには、ある程度の読み書きが必要であるとしている。聞き取りづらいことも大きな要因である。文字を目で見ると分かり易いが、高学年でも音声中心の学習であるべきなのであるから、また、文字の指導が中学校と同様に進むわけではないので、canで回避しているということである。canについては、今までも学習してきたのだから、その扱いについての心配がない。課題は、三人称をどのように導入するかの1点である。ここでも、今回の外国語（英語）教育改訂の重要な柱の一つである「子どもたちの関心・意欲を大切にし、さらには、考えること・推測することも大切にしている」わけである。We Can! p38. 39 Let's Watch and Thinkにあるように、会話をしていた外国人の子どもたちの様子を日本人の少年が学級に説明をする場面設定として、三人称を自然な形で導入している。目の前の人のこと以外には三人称を使うことを推測していくこととなっているのである。この活動は、さらに、ゲームなどで慣れ親しみ、学校の中へのインタビュー活動へとその範囲を広げ、最終的にはその情報をシェアしながらクイズを作成することとなっている。

過去形も敢えて、不規則動詞を扱うこととなっている。小学校では、高学年でも耳で聞くことが最も大切な活動であることなのだから、例えば、goとwentであれば、はっきりと音の違いが判り聞き取れるということになる。saw/ateといった単語も分かり易い。規則動詞の聞き取りは容易でないと、扱いを限定的な単語としている。過去の話の場面設定をしっかりとしないと規則動詞はわからなくなってしまうことも要因の一つである。6年生では、このレベルの読み・書きなのだとすることを十分に理解して指導に当たらなければならない。さらに、肯定文のみの扱いであることにも留意しておく必要がある。

以上のことは、読む・書くという活動とも密接に関係している。中学校の英語科では、書く活動がある程度進んだ状態で過去形を扱うこととなる。したがって、-edを付ける規則で縛る

ことができるが、小学校ではできないのである。

動名詞については、児童が can の使用をためらう傾向があることからの設定となっている。したがって、その代わりの表現として、be good at を活用して、動名詞を入れているということである。

【⑥細かなステップを踏んだ、読む・書く活動の設定・⑦ゆっくり文字を読んだり、書いたりする活動の設定・⑧読んだり、書いたりする必然性のある活動の設定】

読むこと・書くことは丁寧に段階を踏んで

今回の改定や新設の中で、関心度が高い部分のひとつである。小学校教員もさることながら、中学校教員にとっても重要な部分である。⑥⑦⑧の表題にある3点となっている。アルファベットの扱いは別として、この3点は高学年のみで扱うこととなっている。そのための活動として、Let's Read and Write (5・6年生)、Let's Read and Watch (6年生のみ、しかも限定的な単元での扱い) となっている。We Can! 2 unit5を例としてみると、Let's Read and Write との関連で扱っていることがわかる。

小学生にとって、いきなり読み・書きをすることは極めて困難である。5年生で、アルファベットの大文字との出会い直しをユニット4までの30時間かけて行い、学び直しを丁寧に行っているのもそのためである。その際、以下の3点に留意することとしている。

1. 四線に文字を書くことができるようにする。
2. 文字をみて、発音することができるか、読むことができるようにする。
3. 文字を識別できるようにする。

このような学びとしているのは、「できるようにする」という目標の設定があることにもよっている。定着がねらいのひとつであることを強く意識しなければならないのである。文字指導は、この後、5学年の We Can! 1 Unit5から、単語・語句・表現と進んでいくこととなっている。この時も、まずは「書き写し」の段階を踏む。例文を元に何度も聞き、話している文である。それを1時間の終わりに短時間を設定して書き写すこととなる。この地道な取組が、・単語と単語の間にスペースがあること、・文字と文字が集まって単語になること、・いつも I という言葉の後に動作を表す言葉がくること、に気付くこととなるのである。

また、これは、目で見ること大切な要素とされている。英語の語順に気付くことにつながるからである。忘れてはならないところである。

6学年では、これらを繰り返すことを大切にしていけることが重要である。

○小学生は慣れ親しんだ言葉と文字の照合をしていくのだということを理解して指導に当たりたい。

○音声化できるということは、意味がわかっているということである。

その後、テキストのどれかで確かめるのである。さらに、映像資料で確かめることも大切に行なければならない。

【⑨読むことになれる、自分で読むようになる活動の設定】

（読むことの前提としての書くことについて）小学生にとっては極めて困難なこととなる。それは、書くことの本来の意味は、作文をすることを指すからである。学習指導要領には、書くことについて、1. 文字レベルのこと→2. 書き写すこと→3. 書くことができる、という段階で示している。いうまでもなく、3. 4年→5年→6年、である。

中学校では、書くことは、文章の構造を理解し、作文することを指す。しかし、小学生には極めて困難であることは明らかである。したがって、6年生であっても、例文を活用することとなっている。

例えば、A: I can play ○○○. A: What sports can you play? B: Baseball.と進んだ時に、Baseballの綴りがわからない場合には、ワークシートや教室内掲示、等を利用することを促すのである。あくまでも、例文を基にしながら、その中から選んで作文をすることとなるのである。

（読むことについて）これも、書くことと同様に大変に難しい活動である。丁寧に行っていたいものである。したがって、新教材の5年生では、絵本を活用している。We Can 1を例にとると、各単元の8ページ目に必ずストーリーが掲載されていることがわかる。全ての単元が終わった時、一冊の絵本が完成することになる。映像も、積み重ねが意識できるようになっている。6年生は、1話ずつの読み切りとなっている。ひとつの話の中に音韻を踏むようになっていることも特徴である。We Can! 2 unit1 p9を例にしてみると、自己紹介も韻を踏むようになっていることがわかる。子どもたちに対して、ただ読みなさいという指導はなじまないし、無理である。ここでも、丁寧な指導が肝要である。

1. 読み聞かせをして、文字を指で押さえる。→2. 音声が続いて話してみる。→3. 毎時間少しずつふれていく、というようなことを大切にしていくことが重要である。長い文章のもので、それまでに音声で十分に親しんでいたものが並んでいるので理解していくことができるようになっているのである。

V A 教員養成系短期大学で必要と考えられる新学習指導要領における 小学校外国語（英語）教育の早期化・教科化に対する条件整備

a. カリキュラム研修

（1）カリキュラムの理解

上記、新教材の特徴及び全体の単元配列を研修することが最も大切なポイントとなる。加えて、新教材での実践を積み重ねている札幌市立大倉山小学校等の指導案を基にした研修が必要である。北海道内では、第14回全国小学校英語活動実践研究大会指導案を資料とすべきである。現段階では、全国でも稀有な実践である。

（2）移行期間の2年間のカリキュラム編成にとって必要なもの

以下の一覧表（図8）は、文部科学省から示されているものである。全学年分について、

これからの2年間の教材の扱いについての指示したものである。これらは、前述の新教材の特徴と密接に関係しているものであるから、詳細に読み込みをしていく必要がある。各教育委員会レベルでは、新教材のすべてを扱わないところもあるため、移行期間の措置については、扱うべき内容を正しく理解していかなければならない。

(3) 小学校外国語活動と外国語科のカリキュラムの相違点

関連については、敢えて共通点を整理する。教材が新設されているのだから、違いを挙げていくことよりも共通点を理解して指導に当たることのほうが効率良く、分かり易いからである。以下に、ハイフレンズと新教材の共通点を示す。移行期間中はハイフレンズを活用しながらの実践となることから、重要な研修のポイントである。

- ①興味関心にあう題材の設定…全学年がその設定となっている。
- ②音声で考えや気持ちを伝えよう活動の設定が十分にされている。高学年であっても、音声中心であるため、チャンツで練習、レッツプレイでゲームといった活動はやはり基本である。ただし、慣れ親しみて終わるのか、定着までねらうのかの違いは大きい。教科となっている学年は注意して指導に当たる必要がある。
- ③英語の発音やリズムに十分慣れ親しむための活動の設定

Let's Listen/Let's Play/Let's Chants (Sing)

(4) 評価の在り方

評価規準、評価方法など、新学習指導要領の下での学習評価については、平成28年12月の中教審答申の指摘を踏まえ、今後の国における具体的な検討を受けて、追記・修正をする予定とされている。なお、平成30・31年度の移行期間における学習評価については、平成29年度中に通知される予定である。このような状況の中ではあるが、毎回の授業ですべてをみとめるのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、○多面的・多角的な評価(作成物、発表、グループ討議などのパフォーマンス評価)○粘り強く知識・理解を獲得したり、思考・判断・表現したりしようとしているかなどの意志的な側面も評価、とされている。現在までの全国の実践を見ても同様となっている。ただ、言葉上では同じであっても、実際に、子どもの英語力を重視する傾向の考え方も一部にはあるようである。あくまでも、評価のための評価とならないようにすることが重要である。

前ページに、現在、使われることの多いとされているカードの例(図9)を示した。また、小学校の単位時間での評価、単元を通した評価などの構造についても理解していく必要がある。

題材	主な事例	目標例
1 自己紹介	I'm from hometown. I like Japan. I want to go to my hometown. My birthday is... My nickname is...	自己紹介に関する表現や、文法的要素が分かる。簡単な、好きなことやできることなどについて、基本的な表現を使い、音聲で慣れ親しんだ簡単な表現を使う。 自己紹介を通して、その国語を伝えたり、自分の好きなことやできることなどについて伝え合う。自己紹介に関する簡単な語句を覚えるが読み、まとまりのある文脈の中で使うことができるようになる。
2 日本文化	Welcome to Japan. In autumn, we have Star Festival. Star Festival is in July...	行事や遊び、食べ物についての表現、簡単な表現が分かる。 日本文化について自分の考えや気持ちを伝えたり、外国人に紹介したい日本文化について、例を参考に簡単な語句や基本的な表現を用いて説明する。 日本文化について伝え合う。
3 家族で過ごす日本人	I love my family. I love my mother. I love my father. I love my brother. I love my sister. I love my grandparents.	家族に関する表現や、家族の役割や関係性について、簡単な表現が分かる。 家族に関する表現や、家族の役割や関係性について、簡単な表現が分かる。 家族に関する表現や、家族の役割や関係性について、簡単な表現が分かる。
4 住んでいる町・地域の特色	We have many things. We can... Do you have...? Hometown is a nice town...	地域に関する表現や、地域の特色や魅力について、簡単な表現が分かる。 地域に関する表現や、地域の特色や魅力について、簡単な表現が分かる。 地域に関する表現や、地域の特色や魅力について、簡単な表現が分かる。
5 趣味の楽しさ	I want to be a soccer player. I like soccer. I like to play soccer. I like to play soccer.	趣味に関する表現や、趣味の楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。 趣味に関する表現や、趣味の楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。 趣味に関する表現や、趣味の楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。
6 スポーツ・レジャー・ゲーム	What sport do you want to watch? I want to watch... Why? Because I like... Are you good at...?	スポーツやゲームに関する表現や、スポーツやゲームの楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。 スポーツやゲームに関する表現や、スポーツやゲームの楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。 スポーツやゲームに関する表現や、スポーツやゲームの楽しさや魅力について、簡単な表現が分かる。
7 小学校生活	What's your best memory? We had many happy memories... We were so happy when we played... We were so happy when we played...	小学校生活に関する表現や、小学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。 小学校生活に関する表現や、小学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。 小学校生活に関する表現や、小学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。
8 将来・将来の夢	What do you want to be? I want to be a vet because I like animals.	将来に関する表現や、将来の夢や目標について、簡単な表現が分かる。 将来に関する表現や、将来の夢や目標について、簡単な表現が分かる。 将来に関する表現や、将来の夢や目標について、簡単な表現が分かる。
9 中学校生活	I want to join the soccer club (club). I like soccer. I like to play soccer. I like to play soccer.	中学校生活に関する表現や、中学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。 中学校生活に関する表現や、中学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。 中学校生活に関する表現や、中学校生活の思い出や楽しさについて、簡単な表現が分かる。

図 8

例として、札幌市立大倉山小学校のもの（図10）を掲載した。また、パフォーマンス評価を行っているとの情報もある。図11は、研修ガイドブックに示されていたものである。写真は、ネイティブが聞き取りをしているものであるが、この状況を作り出している自治体は多くないのではないかと推測している。



図9

文部科学省によると、平成30、31年度も現在のように、表記での評価でよい、現段階では、評定を行わなくてもよいとしている。北海道内・札幌市内の評価の実情や通知表についての理解も深めていく必要がある。

b. 指導法研修

（1）授業で培いたい子どもたちの資質と能力

これについては、各自治体や学校によって異なる部分はあるが、根本は「自主的で対話的で深い学び」である。問題解決の姿と言い換えてもよいと思われるし、自治体によっては違う表現を使用していることもある。札幌市は、課題探求的な学習としている。これについては本論の中でも、最重要かつ最難関な課題であるとしている。小学校の授業として成立しているか否かという点である。学生にとってのハードルは、かなり高い。しかし、この課題の克服なくして、

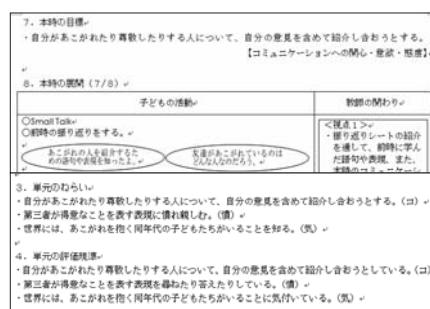


図10



図11

外国語教育のみならず、指導全体に対する理解を得ながら授業を進めることは不可能である。

様々な学校の指導案があるが、問題解決的な展開を確実にしている学校のものを使用し、その構造と要素を徹底して研修しなければならない。例示（図12）として、札幌市立大倉山小学校が平成29年12月に全国小学校英語活動実践研究大会を開催した際の指導案を掲載した。

○課題設定は、子どもの必要感を基盤としているか、○問題解決をする場面が明確か、○変容の自覚を意識できる場を保証しているか、○確かな英語力が身についたかといった点をつぶさに厳しく見ていく必要がある。



図12

(2) 指導案の構成(児童の実態・教材の捉え・単元構成・単位時間の指導)

指導案の構成については、様々なものがあることを知り、その形式の中に子どもの問題解決の姿を描くことができるのか、子どもの様子を観察しながら研修していく必要がある。可能な状況を実現できるように準備を進めるために、本学近隣の小学校のご協力をいただく方法が最も良いと考えられる。

VI B 現在の公立小学校で必要と考えられる新学習指導要領における 小学校外国語(英語)教育の早期化・教科化に対する条件整備

c. カリキュラム整備

(1) 市町村教育委員会の方針及び各学校の学校経営方針、各学校の外国語教育に対する考え方を勘案したカリキュラムの編成・整備

教育委員会からの情報に従うことは、最も合理的な方法かもしれない。しかし、各学校の実情に合致しているのかという点で、学校長がその実施についてどのように判断するかが最も重要である。すなわち、教員各々が指導できるレベルにあるか否かということである。この問題に対しては、カリキュラムの改編と、学校体制の整備の両面から対応していく必要がある。しかし、実際には、カリキュラムの改編を可能とする学校は限られることは明らかである。したがって、現在の多くの学校が行っているように、英語への拒否感の少ない教員を活用したり、指導的な立場の教員に指導の依頼をしたりするなどの方法をとっている。このことは、長期的な視野で考えた時、各小学校の外国語(英語)教育の力が全体としては低下したり、担任が固定的になってしまったりする危険性をはらんでいることは否めない。各教育委員会の専科指導体制の整備といった行政面の動きと連動して考えていくことが必要である。

(2) 札幌市教育委員会作成「指導の手引き」を基盤とした場合

完成版は、平成30年2月発行とされており、その時点から「手引き」を活用して各学校毎に独自のカリキュラム編成をすることは極めて困難である。平成30年度は、「手引き」を活用しつつ、平成31年度に備えることとなる。札幌市教育委員会は、平成31年度には、時数の増加をすることとしていると明らかにしているので、平成31年度についてもそのままの状態を活用することが可能となっている。しかし、前述のように、指導者が十分な指導レベルにあるのかという問題については、各学校共に明確な答えをもっていない。各学校で設定している外国語教育中核教員による研修、各学校独自の研修、外国語活動についての教科研究部、等の設定や設置を確実なものにしていく必要がある。

(3) 各学校の実態に合わせた指導補助教材の準備の必要性

新教材に配布を目前にし、それに付属している指導補助教材の存在に安どしている状況では、4月から即座に始まる指導に対応できない。印刷・配布できる状態への準備等に速度をもってあたらなければならない。

(4) 次年度から使用する新教材冊子に付属している教材を研修する必要性

上記(3)の準備と伴に行っていくものとなるが、平成29年度中の研修は期間が短く、極めて困難である。平成30年度の研修計画を早急にたて、計画的に実施していく体制を確立すべきである。

d. 指導法研修

(1) 新教材の具体的な指導場面に必要な教材の準備とそれを使用した研修

教材についての研修をそのみで扱うことは効率的でない。授業研究と併せて行うか、授業の想定をもった研修としたいところである。教職員からの必要感を捉えつつ、研究担当主任や管理職の積極的なリードが不可欠である。

(2) 主体的で対話的な深い学びが実現できる授業の在り方についての研究と研修

現在の小学校には、外国語活動の授業で問題解決的な展開ができるのかという単純な疑問がある。ゲームをして終わっているのではないかという、実態を把握していない現状が多く、教員の中にあることは事実である。これは、実際の最先端の外国語授業を参観する機会が多くないことが原因の一つである。学校長の強いリーダーシップによって準備と伴に理解を進めることが欠かせない。外国語の授業における「主体的で対話的な深い学び」とは何を指すのか、子どもの姿で実証的に研究を進めていく必要がある。

(3) 教職員の英語力の向上とは、何を目指すべきか

今回は、クラスルームイングリッシュについてのみ述べる。文部科学省研修ガイドブックには、多くの例文が掲載されており、それをそのまま活用することが最も望ましい。クラスルームイングリッシュの最も大切なポイントは、児童の伸びや頑張りを認めるために使用するということである。

併せて、授業でのスモールトークやデモンストレーションなどでも、自信をもって明快に言葉を発することができるように、発話の機会を増やし慣れていくことが必要である。外国語指導の時間だけでは対応しきれない場合も多いことから、学校体制として、英語を積極的に使用することを進めることも併せて行い、教職員の慣れも高めたい。

Ⅶ ま と め

以下①～⑪には、先に示した研修の様々なパターンと新教材の特色の関連を示す。研修及びカリキュラム整備に当たる場合には、下図の相関を確認しながら、進めたい。

年度	A 教員養成系短期大学			
	a. カリキュラム研修		b. 指導法研修	
	パターン番号	新教材の特徴	パターン番号	新教材の特徴
2018	①	全特徴の理解と授業観察及び模擬授業 1	④	全特徴の実体験
2019	②	全特徴の理解と授業観察及び模擬授業 2	⑤	全特徴の実体験と模擬授業成果の検証・還元
2020	③	全特徴の理解と授業観察及び模擬授業，独自カリキュラム試案作成	⑤	全特徴の実体験と模擬授業成果の検証・還元
年度	B 現在の公立小学校			
	c. カリキュラム整備		d. 指導法研修	
	パターン番号	新教材の特徴	パターン番号	新教材の特徴
2018	⑥	全特徴の理解	⑨	全特徴の実際
2019	⑦	全特徴の理解と自校カリキュラムへの反映	⑩	全特徴の実際とカリキュラムとの整合
2020	⑧	全特徴の理解と指導の実際との整合，カリキュラムの検証	⑪	全特徴の実際と日常指導との整合及び修正，授業研究

小学校外国語活動・外国語科は，中学校英語の前倒しではない。6年間にわたった小学校外国語活動の成果と課題をふまえて，設定されている全く新しい教科である。

本論で，条件整備を考えていく場合に，最も重要であることは，実際に指導ができるようになる条件整備であること，そして，それが広く，児童・教職員・保護者に必要不可欠な活動や教科であると強く認識されていくことである。外国語活動や外国語科を通して，確かに子どもが育っていくのだという実感をもつことができた時，我々の条件整備への姿勢も加速することとなる。

【引用及び参考文献】

- [文部科学省] 小学校外国語・外国語活動児童用冊子・教師用指導書（3～6年生用）/デジタル教材（5.6年生用）/6年生用年間指導計画例/mextチャンネル/小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック/学習指導要領（平成29年3月公示）
- [札幌市立大倉山小学校] 第14回全国小学校英語活動実践研究大会指導案（5学年）